雲華（うんげ）

1773(安永2)年～1850(嘉永3)年

雲華上人は、豊後国竹田の満徳寺（まんとくじ）に生まれました。姓は末弘、名は信慶、雲華院大含と称し、鴻雪・染香人など諸号があります。寛政3(1791）年豊前国中津の正行寺（しょうぎょうじ）の皆住院鳳嶺に見出され同寺の養子に入り、第十六代寺主となり、後に京都に出て天保5(1834)年からは東本願寺の講師（仏典の講義を行う、最高の学階）を務めました。また寺院の土木事業の財を集めるために全国各地を巡り、ほぼ踏破したといいます。筑前国へと出向き儒学者・亀井南溟に師事し、その子昭陽や日田の広瀬淡窓（ひろせたんそう）らと交流を持ちました。京都では枳東園（しとうえん）という居をかまえ、頼山陽や篠崎小竹（しのざきしょうちく）、貫名海屋らさまざまな文人墨客と交流を持ちました。雲華の深い教養と詩書画の才能は、こうした交流関係から育まれていったと思われます。詩は西海一と歌われた南溟の指導や山陽らの影響を受け、書においては「懐素（かいそ、中国・唐の書の大家）、道風（小野道風おののみちかぜ、平安時代の書家）の態あり」と評されました。また蘭を描いた絵は特に有名で、養父に戒められながらも務めの傍ら熱心に描いたとされます。その清らかで馥郁たる香の漂うような蘭画は時の仁孝天皇（にんこうてんのう、在位1817年～1846年）に献上するところとなり、豊かな筆墨がたたえられました。

また文政元(1818)年に山国川沿岸の名勝・耶馬溪を頼山陽と共に訪れた事でも有名です。頼山陽はその時の体験をもとに耶馬の風景を巻物に描きおさめました。かの地を訪れた多くの文人の感動の流れの中に、雲華もまた身を置いていたのです。同郷の文人画家田能村竹田（たのむらちくでん）が記した『竹田荘師友画録』からも、雲華の人柄がうかがえます。学問に深く才気に富み、人となりは風流で瀟洒、酒ではなく茶を好み自ら製し、蘭を愛で育てる・・・人並み優れた体躯と容貌を持ち合わせると評された雲華がその冴え冴えとした眼差しで蘭を静かに眺める姿が想像できます。

「蘭図」(1848年)